

甲南大学マネジメント創造学部 (CUBE) 生の GPA 及び能力向上感に影響を与える要因についての調査報告

前田正子*

【要旨】

2009年に開設された甲南大学マネジメント創造学部 (以下 CUBE) では2013年14年15年と3回卒業生を出したが、卒業前に大学生活に関するアンケート調査を実施している。本稿ではそのデータを使用し、GPA や学生の自己能力向上感に影響を与える要因を探った。GPA に関しては、入学選抜方法や CUBE が第一志望だったかどうかより、入学後にどの程度積極的に授業に参加したかの影響力が強い。ただし、女子に比べ男子の GPA は低い。

一方、自己能力の向上感に関しても、授業への取り組みが強い影響力を持っているが、「経済や政治に関する記事を読む」ことや「海外・国内旅行へ行くこと」「友人や恋人とのつきあい」もそれを向上させている。この自己能力向上感は女子より男子の方が高い。だが、いずれにしても今回の分析からは、GPA においても自己能力の向上感に関しても学生自身の授業への積極的な取り組みが重要であることが分かった。

【キーワード】

GPA, 授業参加総合得点, 能力向上感, 授業外活動

* Hirao School of Management, Konan University

1. はじめに

本稿は、まず第 1 に甲南大学マネジメント創造学部（以下 CUBE）生の卒業時の成績を左右する要因を分析すると共に、第 2 に大学での学びを通して自分の論理的思考能力や説明能力の向上感を持つことができたかどうか、およびその向上感に影響する要因を探ることを目的とする。

成績（GPA）は学生が該当授業の内容をどの程度習得したかを示すものであり、学生の大学での学びの成果を示すものである。一方、CUBE では設立当初からアクティブラーニングを取り入れ、学生に積極的に発言や発表機会を与える少人数教育やプロジェクト型学習を展開し、「自ら学び、考え、行動する」する学生を育成することを目標としてきた。大学教育には授業を通して専門知識を得るだけでなく、何らかの課題に対して論理的に考え、自分の考えを簡潔に文章や言葉にまとめ、人に伝える能力を育成する力もある。

学生たちが大学での学びを通して、「自分の論理的能力が向上した」という自信をもつことができるのであれば、大学教育の成果を自らが実感しているということにもなる。実際に就職活動を経験した 2013 年の CUBE 卒業生に「企業は採用で何を評価していると思うか」と、尋ねたところ、「自分の頭で考えて、自分の意見を述べること」が「大いに評価されている」のが 76.8%、「かなり評価されている」のに 20%の学生が答えている。このように論理的思考能力や説明能力の向上は、学生が社会人として活躍していく基礎力の一つと考えられる。この能力はあくまでも学生の自己評価ではあるが、本稿では GPA と学生の能力向上感の両方を分析することとした。

2. データ

今回の分析に利用するデータは 2009 年に設立された CUBE の卒業生である。CUBE では 2013・14・15 の 3 月に 3 回卒業生を出したが、3 月時点での卒業確定者に学部教育への評価や就職活動についてのアンケート調査を実施しており、この 3 年分の卒業生のデータを使用する。調査期間は卒業判定発表の日から卒業式までの間である。9 月の秋卒業の者は調査に含まれていない。調査に回答した学生は 478 人（男子 203、女子 275）となっている。

2-1. GPA の概要

それでは卒業生の GPA についてみてみよう。GPA 情報に関しては、調査時点で本人に「成績情報使用許可」について尋ね、承諾した者の卒業時点の成績を成績記録から抽出して使用しており、本人が申告した成績ではなく、正確な GPA である。成績情報の使用を拒否した者もいるため、成績情報が入手できた者は 435 人となっている。ちなみに甲南大学の場合、秀が 4、優が 3、良が 2、可が 1、不可が 0 であり、GPA の計算には不可であった授業単位も分母に含めて算出されている。

まず男女で比較した結果を表 1 で示した。GPA 平均では男子が 2.356、女子が 2.465 で

あり、女子の GPA 平均が男子より高くなっており、統計的な有意差を示している。

表 1 男女 GPA 比較

	平均値	標準偏差	サンプル数
男子	2.356	0.468	185
女子	2.465	0.402	250
合計	2.419	0.433	435

$p < 0.01$

入学時の選抜方法で違いあるかどうかについても集計した。選抜方法は一般入試、AO、公募推薦、指定校推薦、その他の 5 つに分類した。結果を表 2 にまとめたが、選抜方法による有意差は認められなかった。

表 2 入学選抜ごとの GPA 平均値比較

	平均値	標準偏差	サンプル数
一般入試	2.389	0.418	204
AO	2.432	0.438	57
公募推薦	2.554	0.438	52
指定校推薦	2.400	0.410	86
その他	2.425	0.413	31
合計	2.418	0.434	430

有意差なし

CUBE が第一志望かどうかに基づいて GPA 平均を比較したのが表 3 である。選択肢は 3 つであり、「1.第一志望」、「2.国公立志望」、「3.私立他大志望」である。つまり選択肢の 2 と 3 の選択肢を選んだものは CUBE が第一志望ではなく、他の大学が第一志望であり、そこに行けなかったために CUBE に来た者ということになる。

表 3 第一志望かどうか毎の GPA 平均値比較

	平均値	標準偏差	サンプル数
1.第一志望	2.399*	0.447	238
2.国公立志望	2.539	0.414	67
3.私立他大志望	2.391	0.406	123
合計	2.418	0.432	428

* $p < 0.05$

これを見ると、「2. 国公立志望」が平均値で 2.539 と他のグループより高くなっており、統計的有意差が出ている。この有意差は「2. 国公立志望」が「1. 第一志望」、「3. 私立他大志望」より GPA が高いということであり、「1. 第一志望」と「3. 私立他大志望」の GPA の間には統計的有意差は認められない。

次に入学年度で差があるのかも見てみた、CUBE は新設学部であり、2009 年入学者が第 1 期生である。その後 2011 年 4 月入学、2015 年 3 月卒業者まで出している。表 4 に入学年度ごとに GPA の平均値をみると、1 期生が最も高く、統計的有意差を示している。これは 1 期生の成績が 2 期生より高いという有意差であり、3 期生とは有意差がない。また、2 期生の GPA が低く、3 期生であがっているが、この差異には有意差は認められない。

また、2 期生のサンプル数が少ないのは、そもそも卒業生アンケートに答えた者が少ないだけでなく、成績使用許可をくれた者が少ないからである。そのため全体を代表しているとは断定できない。だが、CUBE の教員においても 2 期生の学校へのコミットメント意欲が低いというのは、共通して持たれた印象でもあり、それが調査への回答人数の少なさにも繋がっていると推測される。さらに 2 期生以降は、卒業判定結果をインターネットで見られるようになり、学校にまで掲示を確認しに来なくて良くなったということも、調査回答者が減っている理由の一つである。

表 4 入学年度による GPA 平均比較

	平均値	標準偏差	サンプル数
1 期生(2009 年入学)	2.481*	0.452	160
2 期生(2010 年入学)	2.350	0.446	127
3 期生(2011 年入学)	2.411	0.390	148
	2.419	0.433	435

* $p < 0.05$

2-2. GPA と授業への取り組み姿勢

それではこの他に、GPA に影響する要因として何があるだろうか。今回の調査では、授業に対する取り組みについての自己評価も聞いている。授業の取り組み姿勢について 9 つ尋ね、それぞれ「当てはまる」「やや当てはまる」「あまり当てはまらない」「当てはまらない」の 4 段階の選択での回答である。

9 つの質問は「a. 授業内容について教員に質問をする」、「b. 授業中のディスカッションに参加する」、「c. 授業の予習や復習をする」、「d. 授業の発表のために時間をかけて準備する」、「e. 卒業論文の作成を一生懸命頑張った」、「f. 期末テストやレポートの準備もきちんとする」、「g. 板書されていない内容もノートに書き写す」、「h. 授業中に私語をする」、「i. 授業に遅刻や欠席をする」となっている。

これらの授業取り組み姿勢と GPA の相関関係について表 5 にまとめてみた。これを見

ると授業への積極的な取り組みが GPA とプラスに相関している。逆に「h.授業中の私語」は「i.遅刻・欠席」の頻度の高さが、GPA にネガティブに相関しており、特に「i.遅刻・欠席」とのマイナスの相関が強い。

表5 GPA と授業への取り組み姿勢との相関

	GPA	a	b	c	d	e	f
a.教員に質問	0.193***						
b.ディスカッション	0.231***	0.609***					
c.予習・復習	0.249***	0.500***	0.377***				
d.発表の準備	0.250***	0.428***	0.466***	0.466***			
e.卒業論文	0.202***	0.296***	0.345***	0.284***	0.426***		
f.期末テスト	0.271***	0.337***	0.377***	0.441***	0.541***	0.487***	
g.ノートに書き写す	0.304***	0.427***	0.421***	0.457***	0.451***	0.276***	0.453***
h.授業中の私語	-0.149**	0.097*	0.087*	0.039	0.013	0.049	0.027
i.遅刻・欠席	-0.305***	0.139**	0.045	0.051	0.005	0.007	-0.147**

	g	h
h.授業中の私語	0.018	
i.遅刻・欠席	-0.041	0.607***

***p<0.001 **p<0.01 *p<0.05 #p<0.1

さらに授業の取り組み姿勢ごとの相関を見てみよう。例えば、「a.教員に質問」することは「b.ディスカッション」への参加との相関係数が 0.609 と高い。また「d.発表の準備」をするのは「f.期末テストの準備」と 0.541 の相関を示している。つまり、授業に積極的に取り組む者は、いずれにしても様々な取り組みをしていると考えられる。一方、ネガティブな授業への取り組み姿勢の「h.授業中の私語」と「i.遅刻・欠席」は 0.607 の相関を示している一方で、他の施極的な授業への取り組みには殆ど相関していない。つまり、遅刻や欠席を頻繁にする者は、授業中の私語も多いということになる。

2-3. 授業参加総合得点

総合的に見ると、学生はどの程度、授業に取り組んでいるのだろうか。授業への取り組み姿勢の概要を見るために a から i の取り組み度を合成して変数を作成した。「当てはまる」に 4 「やや当てはまる」に 3 「あまり当てはまらない」に 2 「当てはまらない」を 1 として、a から g までの 7 つの項目の得点を足し合わせ、授業参加総合得点とした。この場合、最低点は 7、最高点は 28 点となり、クロンバックの α 係数は 0.836 である。

表 6 には、得点の分布についてまとめた。平均値は 20.615 となっている。

表 6 授業参加総合得点の分布

得点	人数	割合 (%)
7	5	1.08
9	1	0.22
10	3	0.65
11	2	0.43
12	4	0.87
13	1	0.22
14	14	3.03
15	11	2.38
16	26	5.63
17	29	6.28
18	35	7.58
19	35	7.58
20	34	7.36
21	73	15.8
22	45	9.74
23	39	8.44
24	33	7.14
25	19	4.11
26	20	4.33
27	9	1.95
28	24	5.19
計	462	100

2-4. GPA に影響を与える要因分析

それではどのような要因が GPA に影響を与えているのであろうか。次に GPA を被説明変数とした重回帰分析を行った。分析の結果を表 7 にまとめた。

① 説明変数

説明変数は男子ダミー (男子であれば 1、女子は 0 とした)、さらに志望による違いを見るために「第一志望」をベースとして「国公立志望」「私立他大志望」をそれぞれ 0 か 1 のダミー変数、また選抜方法での違いを見るために「一般入試」をベースとして「AO 入

試」「公募」「指定校」「その他」を 0 か 1 のダミー変数とした。この他に授業への取り組み姿勢の影響を見るために、a から i の取り組み度の変数を作成した。「当てはまる」に 4、「やや当てはまる」に 3、「あまり当てはまらない」に 2、「当てはまらない」を 1 として、a から g までの 7 つの項目を投入した。個々の a から g までの取り組み度だけでなく、先の表 6 に挙げた授業参加総合得点も投入した。これは、先に図表 5 でみたように、授業への取り組み姿勢の a から g は相互の相関が高く、すべての変数を投入した場合、多重共線性が起こり本来の変数の影響が見極めにくいということがありからだ。この他に、留年しているかどうかの 0 か 1 のダミー変数も投入した。

② 分析結果

分析結果は表 7 にまとめてみた。モデル 1 は男子ダミーとベースを「第一志望」にして、「国公立志望」か「私立他大志望」かどうかの変数を入れた。男子であることは有意に GPA を下げて一方で、CUBE が「第一志望」であったことに比べ、「国公立志望」は有意に上げているが「私立他大志望」であることは GPA に影響していない。しかし、調整済み R² はわずか 0.024 であり説明力が低い。

モデル 2 は志望度ではなく、選抜方法の違いを説明変数として入れた。基本ベースは一般入試である。同じく男子ダミーは有意に GPA を下げている。一方、一般入試に比べ、公募推薦での入学が GPA を上げる効果を見せているが、これも調整済み R² はわずか 0.017 であり説明力が低い

モデル 3 は授業への取り組み姿勢の変数をすべて投入した。男子ダミーは有意に GPA を下げ、「b.授業中のディスカッションに参加する」、「c.授業の予習や復習をする」「g.板書されていない内容もノートに書き写す」は有意に GPA を上げ、「h.授業中に私語をする」「i.授業に遅刻や欠席をする」は逆に GPA を下げている。また、調整済み R² は 0.274 と大きく上がっている。つまり、第一志望であるかどうかや、入学時の選抜方法よりも実際の授業への取り組み姿勢が GPA に強く影響していることが分かる。また、留年していることは有意に成績を下げている。これはむしろ因果関係が逆で、GPA が低い(成績が悪く)から留年している、ということであろう。

また先に表 5 でみたように、授業への取り組み姿勢の a から g 相互の相関が高く、すべての変数を投入した場合、多重共線性が起こり本来の変数の影響が見極めにくいということもある。例えばモデル 4 では、モデル 3 で影響を示した「b.ディスカッション」や「c.授業の予習や復習」、「g.ノートに書き写す」などの変数を抜いてみると、モデル 3 では影響がなかった「a.教員に質問」「d.発表の準備」などの変数が GPA に対して有意な影響を示している。変数を減らしたため調整済み R² は 0.211 と下がるが、授業の取り組み姿勢の変数同士が多重共線の問題を引き起こしていることが分かる。(ここには記載していないが、さらに変数の「d.発表の準備」をぬくと、「e.卒業論文」も有意なプラスの影響力を示す。

そのため授業参加総合得点として、a から g までの 7 つの授業参加総合得点を合成して

投入することも試みた。先に述べたように、最低点は7、最高点は28点となり、クロンバックの α 係数は0.836である。モデル5と6では個々の授業への取り組みではなく、授業参加総合得点を投入している。

表7 GPAに影響を及ぼす要因

	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4	モデル5	モデル6
男子ダミー	-0.113**	-0.111*	-0.070#	-0.106**	-0.102**	-0.07#
(第一志望)						
国公立志望	0.138*			0.136*	0.153**	0.173**
私立他大希望	-0.001			0.063	0.070#	0.087#
(一般入試)						
AO		0.030				0.067
公募		0.138*				0.141*
指定校		-0.014				-0.022
その他		0.092				0.052
授業参加総合得点					0.043***	0.042***
a.教員に質問			0.026	0.111***		
b.ディスカッション			0.063*			
c.予習・復習			0.062*			
d.発表の準備			0.009	0.049#		
e.卒業論文			0.036	0.031		
f.期末テスト			0.021	0.062#		
g.ノートに書き写す			0.063*			
h.授業中の私語			-0.042#	-0.026		-0.030
i.遅刻・欠席			-0.126***	-0.131***	-0.138***	-0.125***
留年している			-0.507***			-0.500***
調整済み R2	0.024	0.017	0.274	0.211	0.254	0.302
サンプル数	428	430	418	415	415	413

***p<0.001 **p<0.01 *p<0.05 #p<0.1

モデル5では男子ダミーはGPAにマイナスの効果、「国公立志望」はGPAにプラスの効果、「私立他大希望」もプラスの影響がみられる。さらに授業参加度が一つ上がるにつれて、GPAも0.043上がることを示されている。一方、「i.遅刻・欠席」はやはりGPAにマイナスの効果を与えている。

モデル6は同じように授業参加総合得点と「第一志望」の違いと入学方法の違いを入れ

てみた。そうすると「国公立志望」「私立他大志望」「公募」の GPA へのプラスの効果の有意性示されている。一方留年生は有意に成績が低いことがわかる。

3. 論理的思考・説明・分析能力の向上感について

3-1. 論理的思考・説明・分析能力の向上感の分布

次に卒業生たちが、大学での学習を通して、自分たちにどの程度の力が付き、能力が向上したと考えているかについて見てみよう。能力向上感については8つの質問をしている。

「a.自分の主張について根拠に基づいて関係な文章を書く能力」「b.自分の考えや意見を人にわかりやすく伝える能力」「c.1つの物事を複数の視点から考える能力」「d.文献や資料を読み解く能力」「e.必要な文献や統計資料を探す能力」「f.課題を数量的に分析する能力」「g.外国語の能力」「h.異文化を理解する能力」である。これらについて、「向上した」「どちらかといえば向上した」「変わらない」「低下した」として自己評価を聞いた。

この中で特に論理的思考・説明・分析能力の向上感について見るために、a から f までの6つの質問に対しての回答に応じて「向上した」に4、「どちらかといえば向上した」に3、「変わらない」に2、「低下した」に1という得点をつけ、回答者それぞれにその得点を足し合わせ、論理的思考・説明・分析能力の向上感得点を合成した。つまり最低点は6、最高点は24点となる。この能力向上感の得点のクロンバックの α 係数は0.862である。表8に能力向上感得点の分布をまとめた。

表8 能力向上感得点の分布

得点	人数	割合
6	3	0.64
12	15	3.18
13	8	1.69
14	14	2.97
15	22	4.66
16	32	6.78
17	55	11.65
18	105	22.25
19	40	8.47
20	39	8.26
21	27	5.72
22	31	6.57
23	20	4.24
24	61	12.92
計	472	100

この能力向上感得点について男女で比較した結果を表 9 にまとめた。有意に男子の方が高くなっており、表 1 に示した GPA とは逆の結果になっている。つまり成績は男子の方が低いのに、自分の能力が向上したという向上感（自己評価）は男子の方が高い。

表 9 男女の能力向上感得点比較

	平均値	標準偏差	サンプル数
男子	19.46	3.50	201
女子	18.32	3.04	271
合計	18.81	3.29	472

$p < 0.001$

それでは次に入学方法で違いがあるかどうかを見てみよう。結果は表 10 にまとめたが、統計的な有意差は見られなかった。

表 10 入学選抜ごとの能力向上感得点平均値比較

	平均値	標準偏差	サンプル数
一般入試	18.76	3.25	220
AO	19.30	3.87	61
公募	18.49	2.81	57
指定校	18.68	3.03	97
その他	19.45	4.00	33
合計	18.83	3.30	468

有意差無し

さらに第一志望がどうかでもみ表 11 にまとめたが、これも有意差なしとなっている。

表 11 第一志望かどうかでの能力向上感得点平均値比較

	平均値	標準偏差	サンプル数
1. 第一志望	18.86	3.26	263
2. 国公立志望	18.54	3.38	71
3. 私立他大志望	19.05	3.25	131
合計	18.86	3.28	465

有意差無し

次に入学年度の違いでみたものを表 12 にまとめたが、1 期生では 19.42、2 期生では 18.64、

3期生では18.27と卒業年次を追うごとに低くなっており、統計的な有意差も認められる。有意差を示しているのは1期生が2期生や3期生より高いということであり、2期生と3期生の間の有意差は認められない。

表 12 入学年度での能力向上感得点平均値比較

	平均値	標準偏差	サンプル数
1期生(2009年入学)	19.42**	3.18	175
2期生(2010年入学)	18.64	3.38	148
3期生(2011年入学)	18.27	3.26	147
	18.81	3.30	470

**p<0.01

次に表 13 に、a から f までのそれぞれの能力向上感と授業参加総合得点との相関をまとめてみた。GPA と授業参加総合得点と能力向上感がプラスに相関している。だが例えば GPA と「a.簡潔な文章」の相関係数は 0.167 だが、授業参加総合得点は 0.460 であり、GPA よりもむしろ授業参加総合得点のほうが強く相関していることがわかる。

表 13 GPA・授業参加総合得点とそれぞれの能力向上感との相関

	GPA	授業参加総合得点	A	b	c	d	e
授業参加総合得点	0.362***						
a.文章力	0.167***	0.460***					
b.伝える	0.121***	0.461***	0.633***				
c.複数視点	0.212***	0.461***	0.564***	0.631***			
d.文献読解	0.127***	0.422***	0.518***	0.395***	0.526***		
e.統計資料	0.137***	0.425***	0.489***	0.438***	0.532***	0.611***	
f.数量分析	0.058	0.370***	0.400***	0.367***	0.428***	0.550***	0.550***

***p<0.001 **p<0.01 *p<0.05 #p<0.1

3.2. 論理的思考・説明・分析能力の向上感得点に影響を及ぼす要因分析 (その1)

——授業への取り組みの影響について

それでは次に、この能力向上感に影響を与える要因について見てみよう。先ほど作成した論理的思考・説明・分析能力の向上感得点を被説明変数として、重回帰分析を試みた。まずは説明変数に GPA や第一志望かどうか、入学方法や授業参加総合得点を入れ、これらの変数が能力向上感の総合得点に関係があるかどうかを見てみよう。結果は表 14 にまとめた。

表 14 論理的思考・説明・分析能力の向上感得点に影響を及ぼす要因分析 (その1)

	モデル 1	モデル 2	モデル 3	モデル 4	モデル 5	モデル 6
男子ダミー	1.085***	1.107***	0.993***	1.076***	1.078***	1.033***
(第一志望)						
国公立志望	-0.503	-0.477	-0.036	-0.038	0.052	0.043
私立他大志望	0.063	0.161	0.533#	0.533	0.660*	0.553
(一般入試)						
AO		0.354		-0.115		-0.036
公募		-0.271		-0.217		-0.175
指定校		-0.005		-0.194		-0.161
その他		0.184		-0.379		-0.266
(1 期生)						
2 期生	-0.501		-0.176		-0.225	-0.119
3 期生	-0.991**		-0.672*		-0.648*	-0.616*
GPA	1.474***	1.561***	0.056	0.025		-0.034
授業参加総合得点			0.438***	0.452***	0.452***	0.447***
h.授業中の私語				0.167	0.130	0.187
i.遅刻・欠席				-0.187	-0.212	-0.206
留年					-0.156	-0.230
調整済み R2	0.070	0.051	0.308	0.307	0.349	0.309
サンプル数	425	425	415	412	448	412

***p<0.001 **p<0.01 *p<0.05 #p<0.1

表 14 には分析結果のモデルを 6 つ記載した。モデル 1 は男子であることと GPA が能力向上感得点にプラスの効果を示しているが、3 期生であることは 1 期生に比べ、-0.991 と有意に得点を下げている。また第一志望に比べても国公立志望や私立他大志望であること

は影響を示していない。また、調整済み R² が 0.07 と説明力が低い。モデル 2 はモデル 1 から入学期生の変数を抜いて、代わりに選抜方法の変数をいれたが、これも影響を示さず、有意な変数は男子ダミーと GPA になっている。また R² は 0.051 と低いままである。次にモデル 3 では授業参加総合得点を投入した。

モデル 3 では R² が 0.308 となり、モデル 1・2 に比べ大きく説明力が上がっている。男子であること、私立他大学希望であること、授業参加総合得点が 1 点上がると、能力向上感得点が 0.438 向上することが分かる。代わりに GPA の説明力が有意性を失っている。先に図表 5 の分析でみたように GPA には授業への取り組みが深く関わっているためと考えられる。

さらにモデル 4 ではモデル 3 から期生の変数を抜き、入試方法や授業中の私語や欠席を入れてみた。他私立大学希望の変数の影響力が消えたが、その他に大きな変化はない。モデル 5 では入学選抜方法と GPA の変数を抜き、留年変数を投入した。有意な影響を示す変数は、男子ダミー、他私立大学希望、授業参加総合得点がプラス、3 期生がマイナスであり、調整済み R² は 0.349 と上がっている。モデル 6 はすべての変数を投入した。有意な影響を示す変数は、男子ダミー、授業参加総合得点がプラス、3 期生がマイナスであり、私立他大志望はプラスの傾向を示しているものの、p 値が 0.117 である。また、調整済み R² は 0.309 とモデル 5 より下がっており、変数の多重共線性が考えられる。

3.3. 論理的思考・説明・分析能力の向上感得点に影響を及ぼす要因分析 (その 2)

——授業外の取り組みや活動の影響について

先の分析でみたように、能力向上感得点には授業への取り組みが強い影響力を持っている。だが大学での学びは教室の中の授業だけではない。大学生として部活やサークル活動に取り組んだり、旅行したり本を読んだりすることも、大学生の大切な日々の活動の一つである。それではこういった様々な学生時代の活動は能力向上感に影響があるだろうか。

そこで、先の分析と同じように能力向上感得点を被説明変数として重回帰分析を実施した。新たに使用する説明変数は大学在学中に行った 11 の様々な活動である。これは「大学在学中に次のような事柄をどのくらいしましたか」という 11 の活動に対して、「よくした」を 4、「ときどきした」を 3、「あまりしなかった」を 2、「しなかった」を 1 とした。

11 の活動は次のようなものである。「a.大学の授業・プロジェクトへの参加」「b.体育会・文化会・部活」「c.サークル・同好会」「d.小説や専門書を読む」「e.経済や政治に関する記事を読む」「f.美術館や博物館に行く」「g.海外・国内旅行へ行く」「h.公務員試験・資格取得のための勉強」「i.ボランティア活動」「j.アルバイト」「k.友達や恋人との付き合い」である。

結果は表 15 にまとめた。まずモデル 1 は男子ダミー、国公立志望か他私立希望かということと、大学時代に行った様々な活動である。この質問には「a.大学の授業・プロジェクトへの参加」もあるが、モデル 1 では授業外の活動の能力向上感への影響を見るために、

「b.体育会・文化会・部活」から「k.友達や恋人との付き合い」までの10の活動についての変数を投入した。

そうすると、「c.サークル活動」「e.記事を読む」「g.海外・国内旅行」「k.友達との付き合い」が、能力向上感にプラスの影響を与えていることが分かる。それぞれの係数は、活動に関して「しなかった」(1点)の状態から「よくした」(4点)の状態に向かって1点上がるたびに、どの程度能力向上感得点が向上するかを示したものである。」よって、「c.サークル」活動を「しなかった」から「よくした」状態まで1点上がるに応じて、能力向上感総合得点が0.253向上することを示している。

表 15 論理的思考・説明・分析能力の向上感総合得点に影響を及ぼす要因分析 (その2)

	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4	モデル5
男子ダミー	0.183***	1.180***	1.250***	1.123***	1.183***
(第一志望)					
国公立志望	-0.484			-0.244	-0.238
私立他大志望	0.152			0.496#	0.482#
(1期生)					
2期生					-0.229
3期生					-0.490#
授業参加総合得点			0.321***	0.342***	0.318***
(どれぐらい参加)					
a.大学の授業		0.976***	0.415*		0.385#
b.体育会・部活	-0.209	-0.163	-0.198#	-0.222#	-0.198#
c.サークル	0.253*	0.212#	0.176	0.209#	0.198#
d.小説や専門書を読む	0.251	0.169	0.062	0.115	0.102
e.記事を読む	0.897***	0.749***	0.323#	0.340#	0.314#
f.美術館に行く	0.125	0.159	0.124	0.121	0.097
g.海外・国内旅行	0.669***	0.577***	0.477***	0.515***	0.498***
h.資格取得の勉強	-0.171	-0.156	-0.162	-0.171	-0.157
i.ボランティア活動	-0.003	-0.008	-0.074	-0.083	-0.060
j.アルバイト	0.136	0.111	0.150	0.165	0.150
k.友達との付き合い	1.025***	0.857***	0.577**	0.606**	0.539**
調整済み R ²	0.273	0.307	0.404	0.396	0.400
サンプル数	456	463	452	445	443

***p<0.001 **p<0.01 *p<0.05 #p<0.1

同じように「e.記事を読む」「g.海外・国内旅行」もそれぞれ、0.897、0.669 と向上感総合得点を挙げる。またモデル1のR2は0.273となっている。

モデル2は、モデル1から第一志望かどうかを抜き、「a.大学の授業」の変数を投入した。そうすると、この「a.大学の授業」も有意に効いており、参加姿勢が1段階強まるにつれ、向上感総合得点が0.976上がっていくのがわかる。また調整済みR2は0.307となっている。

モデル3はモデル2にさらに「授業参加総合得点」を投入した。すでに先のモデル2では「a.大学の授業」への参加度合いを投入しているが、この「授業参加総合得点」も有意な効果を示しており、「授業参加総合得点」が1上がると、向上感総合得点が0.318上がる関係がわかる。また調整済みR2は0.404と向上している。モデル4は逆に授業参加総合得点を残し、「a.大学の授業」の変数を抜いた。

モデル5は、男子ダミー、国公立志望か他私立希望かということや2期生3期生の変数も投入した。そうすると、男子であること、他私立大学希望であったこと、授業参加総合得点、「a.大学の授業」、「c.サークル」、「g.海外・国内旅行」、「k.友達とのつきあい」がプラスの効果、「b.体育会・部活」はマイナスの効果を示している。「c.サークル活動」が向上感にプラスに働く一方で、「b.体育会・部活」は逆にマイナスの影響を示している。これは、部活のある岡本キャンパスや練習場が西宮キャンパスから遠く、学業との両立が困難であることを示しているのかもしれない。この点においては、さらに検証が必要であろう。また就職活動等においては「j.アルバイト」での経験を売りにする者がいるが、残念ながらアルバイトの経験は自己能力の向上感には結び付いていない。

4. おわりに

今回はCUBEの1・2・3期(2013から15年卒)の卒業生への卒業前調査をもとに、GPAに学生自身の能力向上感影響を与える要因などについて分析した。

GPAについては以下のことが分かった。男子であることや遅刻や欠席をすることはGPAを低める。また、CUBEが第一志望ではなく、国公立志望であったことや、一般入試に比べ公募推薦で入学したことはGPAを高めるが、何よりも強い影響力を示しているのは授業への取り組み姿勢である。どんな選抜方法で入学したかよりも、入学後、いかに積極的に授業に取り組むかがGPAを引き上げている。また、GPAは男子より女子が高く、能力向上感も女子より男子が高い。

学生自身の能力向上感を高めているのは、GPAではなく、授業への取り組み姿勢そのものである。自分で積極的に取り組むことが、必ずしもGPAの高さには結び付かなくても、自己能力向上感に結び付いている。つまりGPAという結果よりも、学びのプロセスそのものが、学生の能力向上感に結び付いていると考えられる。をまた学業以外の課外活動、例えば「海外・国内旅行」や「友達とのつきあい」「記事を読む」ことなどを、よくすることも自己能力向上感にプラスの影響をもたらしている。

この結果はなによりも学生の本分は勉強であり、授業への積極的な取り組みが自己能力向上感を高め、大学で学んだ成果を自分で体感できることを示している。その上で、旅行をしたり友人との付き合いを深め、視野を広げるために新聞記事を読んだりすること。まさに「よく学び・よく遊べ」が学生の成長に結びつくと考えられる。

表 16 分析に使用した変数の記述統計

変数名	平均値	標準偏差	最小値	最大値	度数
GPA	2.419	0.433	1.12	3.38	435
能力向上感得点	18.81	3.290	6	24	472
男子ダミー	0.425	0.495	0	1	478
第一志望	0.567	0.496	0	1	469
国公立志望	0.151	0.359	0	1	469
他私立大希望	0.281	0.450	0	1	469
一般入試	0.468	0.500	0	1	472
AO 入試	0.131	0.338	0	1	472
公募	0.123	0.329	0	1	472
指定校	0.208	0.406	0	1	472
その他	0.070	0.255	0	1	472
授業参加総合得点	20.615	4.032	7	28	462
授業への取り組み					
a.教員に質問	2.782	0.809	1	4	473
b.ディスカッション	3.025	0.780	1	4	474
c.予習・復習	2.504	0.849	1	4	472
d.発表の準備	3.013	0.811	1	4	469
e.卒業論文	3.362	0.783	1	4	473
f.期末テスト	3.117	0.785	1	4	472
g.ノートに書き写す	2.800	0.884	1	4	471
h.授業中の私語	2.386	0.830	1	4	471
i.遅刻・欠席	2.311	0.939	1	4	472
留年している	0.032	0.175	0	1	476
1 期生 (2009 年入学)	0.370	0.483	0	1	476
2 期生 (2010 年入学)	0.317	0.466	0	1	476
3 期生 (2011 年入学)	0.313	0.464	0	1	476
様々な活動をしたか					
a.大学の授業	3.558	0.679	1	4	477
b.体育会・部活	1.742	1.054	1	4	477
c.サークル	2.139	1.151	1	4	476
d.小説や専門書を読む	2.451	0.968	1	4	477
e.記事を読む	2.463	0.885	1	4	477
f.美術館に行く	2.369	1.022	1	4	477
g.海外・国内旅行	3.249	0.925	1	4	474
h.資格取得の勉強	1.933	1.007	1	4	476
i.ボランティア活動	1.930	1.022	1	4	473
j.アルバイト	3.472	0.812	1	4	475
k.友達とのつきあい	3.496	0.712	1	4	476

この調査は科学研究費補助金・基盤研究 (C)「大学生の職業意識の涵養と就業継続支援における大学と企業の役割」の補助を受けて実施されている。深謝申し上げたい。

参考文献

金政芸 (2011)「大学生の論理的思考および説明能力の向上感の規定要因」

『第 2 回社会学部卒業生アンケートの調査報告書』同志社大学社会学部 GP 評価委員会, pp.1-9.

同志社大学社会学部 GP 評価委員会 (2011)『第 2 回社会学部卒業生アンケートの調査報告書』.

同志社大学社会学部 GP 評価委員会 (2012)『第 3 回社会学部卒業生アンケートの調査報告書』.

上記調査は平成 20 年度文部科学省教育 GP 採択事業「相互啓発による創造的学力育成カリキュラムの一環として実施されている.

(<http://ssgp.doshisha.ac.jp/questionnaire/questionnaire.html>)

西丸良一 (2014)「大学生の学業成績・能力向上感と入試選抜方法の関連」

『評論・社会科学』同志社大学, 111 号, pp.141-15.